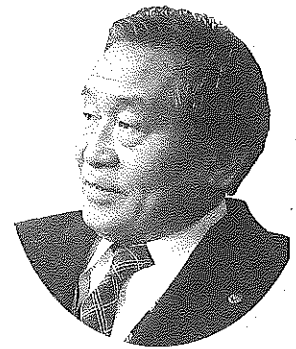


# 和顔愛語



佐藤 昭二

## 覚悟とは

平成23年3月11日私達にとって忘れる事の出来ない大惨事が有った。勿論東日本の大地震であり、それに伴う巨大津波で有る。

そして更にそれに伴って福島原子力発電所の事故が今尚暗い影を落として居る。

政府、国からの情報が何一つ信じられず、国民の皆さんは常に疑心暗鬼の日々が続いてきたように思える。マスコミは常に恐怖感をあおり流れるニュースはネガティブな事ばかり。その中で福島原発の近くの人たち、又近隣の県、東京都の人達も、沢山の方々が県外・都外に逃げ出され、それは今尚続いている。原発事故の翌日には国外に逃げられた方も居た。それ程福島原発事故は国民の皆さんに計り知れない恐怖を与えるたのである。

この度、野田首相は事故の収束宣言をされたが、この原発事故の終息は何を以て終息なのであろうか？とても終息したとは思えない事ばかりである。私は阿蘇の南外輪山に位置する山都町の依頼を受けて、一昨年より「田舎暮らし」の相談を受けながら空き家調査をして居るが、3・11以降急激に都会からの入居者の相談が増えて来ている。幼い子供を抱えて、見えない放射能から逃げ惑う若い夫婦が来て居る。この方々が無事に故郷へ帰還するときがまさに収束であり、終息である。冷温停止状態達成を宣言し、これをもって原発の事故そのものは収束したというのは、詭弁でしかない。

多くの方々がことほど左様に恐怖に耐えながら避難する状態の中でとても印象に残った方が居る。私の友人でもあり、とても尊敬する方で、「美内すずえ」という漫画家である。彼女の作品には「アマテラス」や「ガラスの仮面」等数多くの作品がある。彼女と震災以後についてお話をしていたときのことである。

その彼女が事故当初は自分もこの東京から逃げ出そうと考えていた様だ。しかしその時ふと、「天皇陛下

は如何されているだろう？」と考えた。まさにその時、陛下は皇后さまと一緒に東北の被災地の方々をお見舞いされていた事を知り、「とても自分の考えて居た事が恥ずかしかった」と述べて居られた。そして、今後天皇陛下が東京に居られる間は自分も東京で暮らそう、その間にもし此の身に何が有ろうとも、それは甘んじて受けて行こうと腹を決めた、という事でした。これは美内すずえさんが覚悟を決めたときである。私はこの話を聞いたときに深い感銘を受けた。「覚悟」の定まった人間はなんと力強く美しいものなのだ、と強く思ったのだった。

私達はこの「覚悟」が有るか無いかで、その人の人生が大きく変わって行く事を知らねばならない。力強く美しい人生を歩んでいくのか、そうでないのかが決められるからだ。それは男であれ、女であれ全ての人間に言える事ではないだろうか。

今の政治の世界においても、経済界における大企業の在り方においても、誰一人国民の悲しみ、辛さ、苦しみを背負っている人が居ない様に思う。全てが言い訳の世界になっている。綺麗事の言葉だけを羅列してこの社会を乗り切っている。力強く美しいからはかけ離れた有様だ。私は人間として生まれて来た以上、私たち一人一人が誰かを背負う覚悟を持たなければならないと思っている。それは一言で言うなら「拝金主義・利己主義からの脱却」し、「誰かを背負う」ことで力強く美しく生きていくことである。

「誰かを背負う」ことが人間として生まれて来た意味だと思っている。この心を失くした時、親が子供を、子供が親を、妻が夫を、夫が妻を、そして兄弟が姉妹が殺し合う時代が来るであろう、否、すでにその時に入っている。教育の貧困の結果が形になって表れて来た、今からでも遅くは無い。お互いを思いやる心の発露が必要なのだ、私一人が…私から始める時が来た。まさに、地球市民運動である。そして、人生とは「馬鹿と貧乏と死の稽古」だ、という古い箴言に心傾けるときだろう。